

個の自立をたすける「子ども文化村」づくり

—教室での実践から地域での活動への道—

室田 明美*

Forming cultural village of children for stimulating independence

Akemi MUROTA

要旨：一つのことをじっくりと追求して知恵と技が身につく「本物の学び」が、人間としての自立に必要であると、子どもの事実から、確信する。教師は与えられた教科書の内容をこなし、子どもは暗記によるテストの得点競争を強いられる学校教育に限界を感じた。恵まれた自然と、様々な人の力をいかし、地域で子どもの自立を促す空間「子ども文化村」をつくった。活動に至る経過とその根底にある哲学を示す。

キーワード：本物の学び・地域での子育て・空間づくり・手づくり文化・人とのかかわり

1. はじめに

子どもが「人間」として「自立」できる空間と時間を創ろうとの強い思いを抱き、今春(2021年5月)から、地域(埼玉県東松山市下唐子)で「子ども文化村」の活動を始める。そのねらいと必要性を示す。この活動の根底にあるものは、小学校教師として、教室で取り組んだ実践である。そして「平和・子ども・命」を尊重する哲学である。

東松山市唐子地域を舞台にした児童文学、打木村治『天の園』の中に「景色でお腹のくちくなるような子どもに育てる」という言葉がある。豊かな自然の中で、子どもが、人と人のかかわりによって、自立する力を培うよう、「子ども文化村」の活動を進めたい。

2. 「子ども文化村」の事実—子どもの学び育つ場を創る

自宅の敷地内を「子ども文化村」とし、子どもが活動できる空間として「子ども図書館」「子ども美術館」「子どものおうち」を設けた。子どもの自立につながる活動を期待している。

①「子ども図書館」—読む

子どもの自立にとって、生身の人間どうしのかかわり合いに加えて、本とのかかわりも不可欠である。自分の心の世界の言葉「内語」が豊かになり、大切な心の宝石の発見につながる。私自身、5歳のころ、本の世界に浸り、登場人物と話をしたり、自分のストーリーを作ったりして、夢をふくらませた。その記憶が60年以上を経た現在でも、心の宝物である。

自身の体験の一方、東松山市立図書館の仕事(図書館協議会副会長)にかかわり、子どもの読書量の激減ぶりを知って、危機感をおぼえた。ゲームやスマホで暇つぶしの毎日、土日は習い事と、受け身の生活。発信元から一方的に情報を受け取るだけでは、子どもを食物にする利益集団に自分の存在を根こそぎ奪われてしまう。同調圧力に潰されてしまう。

*元宮城教育大学教員キャリア研究機構協力研究員

ゆったりと本を手にとり、紙をめくり、ゆっくりと字を読む時間を味わってほしい。

②「子ども美術館」一創る

「子ども美術館」の館長をつとめる中学校2年生の女子は「あるものでつくる」という考えである。「文化村」のある、自然の豊かな地域では、枝、葉、石など、宝物に出会える。日常生活の中で出た、箱、ビン、布、木々など様々なものを組み合わせて、オリジナルの作品ができる。人間が手を動かして知恵を働かせることの意味を実感してもらいたい。

子どものつくった作品を展示する。一人ひとりの発想や表現の意図をゆっくり味わい、その子の良さを再認識する。子どもの知恵と技から学ぶ機会となる。

③「子どものおうち」一動く

14畳の広さの木の部屋に、絵本、手作りの人形を置いた。子どもは、人形を使い、自分たちでストーリーを考え、人形劇をした。親も劇に巻き込み、みんなで楽しんだ。子どもの内に潜んでいる新しい力が引き出される。可能性を発見できる。子どもたちが自分で劇を考え、人形を使って演じることは、文化への入口となる。

3. 「子ども文化村」の哲学—子どもの自立をたすける

子どもの自立をたすける活動の根底をなす哲学として、要である「子ども」「文化」「村」の3つをどうとらえるかが問われる。

① 子ども—一人ひとりのよさを感じとる

親は、自分の夢を子どもに託そうとして、愛情という名目で子どもを束縛してしまうことがある。親は、自分の子どものことをわかったつもりになっているが、生活の流れが優先してしまい、じつくりと子どもをとらえる機会は少ない。

大切なことは、その子がどのような子なのかを、立ち止まって考えることである。子どもの一人ひとりの存在を受けとめる。ありのままの子どもの姿を感じとる。その子のスタートラインをとらえる。子どもの何を見つめるか。

その子が持っている良さを、親が見抜ける機会をつくりたい。

その子の持っているエネルギー量。表現する強さ。

その子の質。話しながら考える。考えた後で話す。

その子の色合い。何に興味がいっているのか。

その子はどこで目を輝かせるのか。

② 文化—本物の学びを味わう

子どもの姿をとらえる際に大切なことは、文化的な活動との出会いの場を創ることである。人間の歴史に注目する。自分たちの手で物を作ることの歴史である。衣食住すべてが手の動きによる人間の知恵の結晶である。電気がないと何もできないのでは、人間が本来持っている知恵が身につかない。手仕事の大切さを実感する体験活動の機会を設けたい。指先の発達に心の発達につながる。知能も伸ばす。根本は、自然から学ぶことである。人間が自然からいかに恩恵を受けているのか、自然との対話によって実感できる。

インターネットで検索すれば、すぐに情報を得て、「知った」気になる。しかし、「わかる」ことではない。やってみなければわからない。夢中になる経験。失敗する経験。根気よく物事に取り組む経験。そして、自問自答しながら自分の足で歩く経験。自分の心身を働かせる経験の積み重ねが、一人ひとりのかけがえのない人生を創り、

自立への道となる。

本当の学力とは、自分という人間を自分が好きになり、人生に目標を持つことができ、文化を自分で生み出せることである。

③ 村—多種多様な人々の生き方にふれる

親と子どもだけの密閉された環境で、現代の子育てである。ともかく「いい」大学に入ることを目指して、幼児期からエネルギーを費やす。ところが、大学卒業後に何をしたいかが見えないし、何があるのかもわからず、困惑してしまう。

昔は、いろいろな人とかかわりの中で、子どもが育った。悪いことをしたら、他所のおじさんに叱られた。泣いていれば、近所のおばさんが寄り添ってくれた。将棋の名人が将棋を指す場面を目にして、将棋の魅力を知ることができた。いろいろな人間に出会い、生き方を実際に学ぶことができた。

人は人の中で育つ。知恵は、人と人とかかわりを通して身につく。文化は人と人とかかわりの中で生じる。みんなで笑い、みんなで衣食住の文化を楽しみ、人間のぬくもり、人間の存在の意味を感じる。子どもだけでなく、親も学べる。

サラブレッドの競走会場のような狭い枠から解放され、自由に歩いたり、走ったりできる広い草原のような「子ども文化村」で、自分の人生を楽しめる体験をしてほしい。親子ともに枠から解放され、親子ともども楽しむ機会としたい。

地域のシニアの力をいかし、あこがれる人間像をもち、多種多様な職業があることを知り、子どもの人生を豊かにする手助けとする。

どんな人になりたいか、どんな仕事があるのか、自分の生き方を考えるヒントを、実際の人とかかわりから学ぶ。

4. 「子ども文化村」までの道のり—活動のいきさつ

「子ども文化村」の活動に至る、事実をつくり、哲学をもつ歩みがあった。

① 教師としての自分の経験

埼玉県新座市の小学校教師として、一人ひとりの子どもの力を引き出そうと、自分なりに実践の創造に努めた。その際、大切にしたことを、以下に示す。

・子ども一人ひとりの存在を受けとめる

給食をとりながら子どもの話をきく「木のレストラン」(昨年度の「実践報告」を参照)を試み、子ども一人ひとりの存在を「一人の人間」としてしっかりとらえた。子どもの声に耳を傾け、呼吸とリズムを感じとり、子どもは「生きている」ことを実感した。

授業を、子どもとつくり上げるようにし、子どもの息づかいを感じ取れる、心の近さを大切にした。授業を進める際に、同じ内容でも、子ども一人ひとりによって、しみこみ方が違う事実を意識した。

・覚える勉強よりも考える勉強を大事にする

「やってみなければわからない」という子どもの言葉を受けとめ、失敗を恐れずに挑戦できる雰囲気、教室につくった。どの子も安心して学べるよう、自分のことを教師が心にとめてくれているという安心感が子どもに伝わるようにした。

教師自身が学びの楽しさを味わい、学びへの追求の姿勢がなければ、目の前の子どもたちに本当の学びは成立しない。本物と偽物を区別する。本物は、目の前の子どもの変化に応じられる軸がある。枠の中に子どもを押し込めない。子どもの成長をとらえ、本当の学力が身につくようにする。

・空間づくり

鉄筋コンクリートの校舎、四角四面の硬い構造の教室に、あたたかい雰囲気をつくろうと、木の家具や、木

製の品物を置き、ぬくもりを感じられるようにした。

机の配置も、授業の内容に応じて変化させた。

子どもが安心して過ごせる時間と空間を用意し、子どもが不安で息ができなくてもがいている時、そばで見守る教師でありたいと、私なりに懸命に頑張った。しかし、学校の異常なほどの多忙さが、子どもと向き合う時間をうばった。体が悲鳴をあげて、47歳で教職を退くことになった。

② すぐれた先輩教師からの学び

教師を辞めた後も、子どもと一緒に学んだ日々が体に刻まれ、子どもの成長を支える教育とはどういうものかという自問自答を続けた。

本物の教師から学ぼうと、実践記録を読んだり、実際に会って話をうかがった。自分の足で立ち、自分の頭で考え、学び合う教師集団の中に身を置きながら、自分なりの方法を見つけて、本気で仕事をしている事実にあふれた。もっと学びたいという意欲が高まった。特に、強い影響を受けた先生は、次の3人の方である。

・岸智先生

唐子地域の方で、教師の情熱を惜しみなく中学生にぶつけた。国語の指導で「生活綴方」に力を注ぎ、生徒に、自分の眼で物を見る、良い眼を持たせたいと奮闘された。さらに、放課後や休日も、ご自身も打ち込んだサッカーの部活指導に熱を入れ、全国レベルの活躍をするチームにした。真の「文武両道」を実現された。

・船戸咲子先生

群馬県の小学校教師として、子どもが持っている底力を見つけ、引き出した。すべての教科の指導に長けていらっしやったが、身体表現がとりわけすばらしい。子どもたちは、指先まで神経を届かせて、身体の美しさを示し、自分なりの表現を創る。実践の根底に、教師の世界観があった。

・牛山佐智恵先生

長野県松本市でご自身の力で保育園を運営された。「子どもの僕(しもべ)」として、子ども一人ひとりの要求に全力で立ち向かった。時の力をいかし、子どもが動くのを待ち、的確なかかわりをして、自立を促した。実践の蓄積をふまえた、子どもへの信頼に支えられた仕事である。子どもに寄り添うとはどういうことか、確かな事実とその詳細な記録から、実感を伴って学べる。

③ 孫娘たちの動きから学ぶ

孫娘とそのいとこたち、3歳から小学校5年生の5人の女の子たち「レインボーチーム」の動きから、子どもの底力を思い知らされた。不用になった段ボールで、人形の「生活」する家を、作り始めた。さらに隣の家、公園、店など、6畳間いっぱいに街を作り上げてしまった。この活動が1年半続いた。話し合い、笑い、時にはけんかもしながら、子どもたちだけの力でやりとげた。

子どもは、まわりの大人が信頼し、時間と空間を確保すれば、力を発揮することを、この事実で実感した。

5. 今後の展望—活動のゆくえ

コロナ禍で制約の多い日々を、子どもが過ごさざるを得ない。都会の人工物の中での「密」状態を抜け出し、デジタルの非現実の世界を問い直し、自然の豊かさから学ぶべきである。「人間」として生きるには、立ち止まり、振り返ることができる空間が必要である。心のオアシスとして、未来へとつながる時間が過ごせる。人間のあり方が根本から問われる今日、子どもはもちろん大人も、生き方自体を問い直すことが、「子ども文化村」の活動でできることを願う。

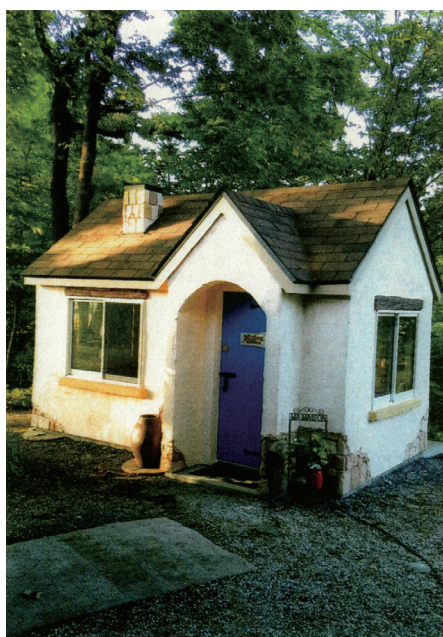
子どもの瞳の輝きから、私は生きる力を得る。「瞳」という文字は、目に「童」＝子どもという意味を含む。子どもが自分の力を発揮できる「子ども文化村」にしたい。



自然に恵まれた「子ども文化村」



「子ども美術館」内部



「子ども美術館」外観



「子どものうち」
内なる力を引き出す